

論文名：日本国における小児の口唇閉鎖不全の有病率-大規模疫学調査-

名前：齊藤一誠

所属：朝日大学歯学部小児歯科学分野

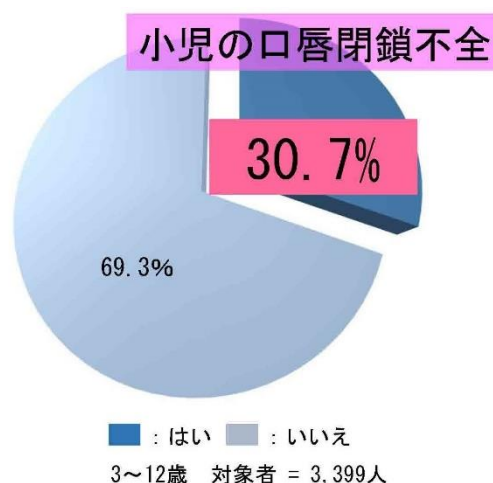
1 臨床歯学領域（口腔科学臨床）の現状と国際比較

1) 口腔の発生・発育の維持・増進

(1) 小児歯科医学

近年の小児の成長発育については、基本的な生活習慣が身についていない、他者とのかかわりが苦手、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている。食べる機能や話す機能を含む口腔機能は、全身の成長発育と密接な関連があり、生命活動の源となるだけでなく、人間形成の基盤や社会性を育むという側面からも重要な機能であるが、近年、口腔機能の発達の遅れ（口腔機能発達不全症）が問題となっている¹⁾。

2021年1月に、我々は国内外で初めてとなる口唇閉鎖不全の有病率に関する大規模疫学調査結果を発表し、日本人の小児の30.7%が日常的な口唇閉鎖不全を示していることを明らかにした²⁾。本研究結果のプレスリリースにおいては、マスメディアの注目度が高く、多くの報道がなされ、国民から大いに注目されていることも明らかになった。口唇閉鎖不全は顎顔面の形態や歯並びに異常をきたすだけでなく、口呼吸やアレルギー性鼻炎など全身的な問題が関連していることが示唆され、口腔機能発達不全症とも関連が強い。ちなみに、二大歯科疾患の1つであるう蝕では、最新の結果である令和2年度学校保健統計調査から12歳児むし歯有病率は29.44%である。単純な比較はできないが、口唇閉鎖不全を有する小児は、う蝕有病者と同等かもしくは多い可能性が考えられることから、口唇閉鎖不全を含む口腔機能発達不全症は、小児期に生じる代表的な歯科疾患として、今後の対策が必要であると考えられる。



謝辞：本研究を進めるにあたり、鹿児島大学小児歯科学分野、大垣女子短期大学、新潟大学小児歯科学分野およびJSPPをはじめ全国で小児歯科医療を専門とする先生方から一方ならぬご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

利益相反：該当なし

参考文献

- [1] 日本歯科医学会，口腔機能発達不全症に関する基本的な考え方（令和2年3月）（令和2年7月22日改訂）<https://www.jads.jp/basic/pdf/document-200722-3.pdf>
- [2] Nogami Y et al. Environ Health Prev Med. 2021;26(1):11. Published 2021 Jan 21. doi:10.1186/s12199-021-00933-5 (IF:3.674, 被引用回数1)